広報九州
国民の森林・国有林
平成24年3月10日
（２０１２年）
No　１６８２
九州森林管理局
〒860-0081
熊本市京町本丁2－7
IP電話 050-3160-6600(代表)
http://www.kyusyu.kokuyurin.go.jp/

森林環境シンポジウムに200人
～増えすぎたシカによる被害を考える～

パネルディスカッションで議論を展開するパネリストの皆さん＝佐伯文化会館

大分県内で最もシカの捕獲数の多い佐伯市の佐伯文化会館において、2月28日に九州森林管理局主催によるシカ被害の現状と対策を考える「九州森林環境シンポジウム」を開きました。あいにくの天候となりましたが、会場には森林林業関係者や一般市民、行政関係者などから約200人の参加がありました。

シンポジウムは第一部／報告、第二部／パネルディスカッションの二部構成で実施。第一部の報告では、専門の立場から4人の報告と九州森林管理局のシカ対策に対する取り組み状況の報告が行われました。

第一部の専門家の報告では、①森林総合研究所九州支所森林動物研究グループ長矢部恒晶氏から「シカの生態と生息状況」②宮崎植物研究会会長の南谷忠志氏から「シカが生態系、生物多様性に与える影響」③大分県農林水産部森との共生推進室鳥獣害対策専門指導員高宮立身氏から「大分県の農林業被害と対策の現状」④宮崎県東臼杵農林振興局林務課林政担当副主幹日高三男氏から「宮崎県の農林業被害と対策の現状」についての報告がありました。

第二部では、コーディネーターに森林総合研究所九州支所支所長中村松三氏を迎え、パネリストには第一部で発表した矢部恒晶氏、南谷忠志氏、高宮立身氏に宮崎県東臼杵農林振興局次長（林務担当）西山悟氏、大分県佐伯市猟友会会長柳井司郎氏、九州森林管理局計画部指導普及課石神智生課長の6人が、農林業の被害防止への取り組み、森林生態系及び生物多様性のためにはシカの個体数調整が必要であること、この他会場からの質問に答えるなど熱心に議論を展開し、参加された方々と一体となって情報を共有できました。

（担当＝指導普及課）

第一部報告会で聞き入る参加の皆さん

鹿児島森林管理署
牧園森林事務所
森林官　岩下晃之

蘇れ霧島の山々

～新燃岳噴火から1年を過ぎて～

鹿児島県と宮崎県に跨る霧島連山は、韓国岳を始めとして、新燃岳、高千穂峰などの火山や、大浪池などの火山湖が多く点在し、また周辺一帯は霧島温泉郷など数多くの温泉地があります。

噴煙を上げる前の新燃岳の春：韓国岳から望む

当地域は1934年に霧島国立公園の指定を受け、1964年には霧島屋久国立公園と名称を変更、そして今年2012年3月16日に世界的に希少な錦江湾の海域カルデラと奥の姶良カルデラを桜島と霧島に加えた霧島錦江湾国立公園と屋久島国立公園の両国立公園が誕生することとなりました。

これまで、当森林事務所の管轄する霧島市牧園町も霧島連山（韓国岳、大浪池、烏帽子岳）や多くの湧泉地を有することもあり四季を通して登山者や温泉客など多くの観光客で賑わいをみせていました。しかし、昨年1月26日、1952年以来52年ぶりに噴火した新燃岳の影響で、これまで四季折々の色合いを楽しませてくれた霧島連山の一部は灰色化し、当初3キロだった立入規制が2月1日の空震を伴う爆発的噴火に伴い4キロに拡大、主要な登山道も全て立入禁止となりマイカーの観光客のみならず列をなしていた大型観光バスの姿も消え、観光地であるにも拘わらず観光客を殆ど見ないという異様な光景が続くこととなり、当然ながら当事務所管内においても事業地の振り替えや、入札の中止などを余儀なくされました。

噴煙を上げる新燃岳：えびの料金所からの遠望

そして、爆発から約8カ月が経ち予断は許しませんが爆発的噴火の一時的な治まりを受け県道規制も一部解除されるなど観光客も少しずつではありますが噴火以前に戻りつつあります。

当署管内では現在、桜島と新燃岳が噴火を続けていますが、これも自然であり小さな我々人間にどうこうできるものではありません。しかし、一日も早く沈静化し地元産業はもちろん霧島連山が「癒しの森」として再生し、温泉とダブルの癒しを求め多くの市民、観光客がこの霧島を訪れ、活気ある霧島が蘇ることを心から祈っています。

民・国連携の進め方を検討

【大分西部森林管理署】当署では、平成22年度管内3地域において森林整備推進協定を締結。今回、協定関係者3者と運営会議を開き今後の事業計画や路網開設など連携の進め方について検討を行いました。午後からは、安心院森林事務所管内国有林（宇佐市）の路網新設工事現場で「路網作設現地検討会」を開催。大分県や管内の各市町の担当者および県内の准フォレスターなど約70人が参加。参加者は、当署職員から排水設備の施工法など、路網開設時のポイントについての説明に真剣に耳を傾けるなど、国有林の路網作設技術に対する関心の高さが伺えました。

熱心に検討する参加の皆さん＝大分西部

一枚の紙から考える

～木になる紙シンポジウムに全国から160人～

2月25日、佐賀県佐賀市市民会館において、木になる紙シンポジウム―一枚の紙から考える森林・地域・循環―が開かれ、九州各地をはじめ全国から約160人が参加しました。

当シンポジウムは、「木になる紙」コピー用紙を、庁舎や小学校などを含む全庁で導入した佐賀市の取り組みが、平成23年度のグリーン購入大賞の最高賞である環境大臣賞を受賞したことを記念して開かれたものです。

シンポジウムでは、まず九州間伐紙の取り組みの創設期に携わった島田泰助前林野庁長官が「力を合わせれば日本の森林は甦る～木になる紙の構想から未来へ～」と題し、今日の森林・林業を取り巻く課題とそれを解決する上での「木になる紙」の有効性について基調講演。次いで、グリーン購入大賞の審査をされたグリーン購入ネットワークの麹谷和也事務局長が「グリーン購入の考え方と木になる紙」と題し、商品選択の基準に環境的な価値を盛り込むグリーン購入法の意義や「木になる紙」の受賞理由などについて基調講演を行いました。

基調講演をする島田前長官＝佐賀市民会館

講演後、「木になる紙」の原料の調達業者、卸販売業者、最終消費者（佐賀市役所）らを交えて行われたパネルディスカッションでは、累計1800万円以上を山側に還元している成果や、少量・個人での購入も視野に入れた販路の拡大などが議論され、会場からも熱心な質問や意見が出されるなど密度の濃いシンポジウムとなりました。

（担当＝企画調整室）

森・林業再生に向け協定締結

【宮崎北部森林管理署】1月25日、当署において宮崎県東臼杵農林振興局、（独）森林総合研究所森林農地整備センター宮崎水源林整備事務所、日本製紙（株）、日本製紙木材（株）西日本支店八代営業所および当署との間で「延岡市祝子川地域森林整備推進協定」を締結しました。

本協定は、隣接する森林において森林共同施業団地を設定し、民有林と国有林が連携して効率的な路網整備や間伐などの森林整備を推進していくことを目的としたもの。今後は、運営会議を開き具体的な取り組みを進めていくこととしています。

連携の握手を交わす皆さん＝宮崎北部

地域林業と共に生きる

ちょっと一言

佐伯広域森林組合の管轄する九州一広い佐伯の森は、従来は、一部には針葉樹植栽されるものの、薪炭用の広葉樹が主体の森林形態であった。

戦後の復興期から経済高度成長期の木材需要の高まりと、薪炭需要の落ち込みや国策による戦後の造林ブームの中で、飛躍的に拡大造林が進んだ地域である。以来、佐伯の森林は佐伯広域森林組合の歴史とともに年輪を刻んできた。森林組合の主導のもとに造林が進み、以来、間伐を推進するための小径木加工場の設置や共販所の設置（2カ所）、さらに間伐量が増えると年間4万立方規模（原木ベース）の製材加工施設や乾燥施設の導入、また杭工場やプレカット工場などの設置、造林ブームから半世紀以上が経過し広大な人工林が成熟期に入り、長年汗を流し大切に育てた木材に高付加価値をつけ販売することにより、その成果を森林所有者（森）に還元し次代の森づくりに貢献するために、平成21年（3年前）に年間原木消費量12万立方の大型加工施設を導入した。

佐伯広域森林組合
代表理事組合長
戸髙壽生さん

現状、価格保証した原木工場直入れ制度など、まだまだ不十分であるが佐伯の森に貢献している。

しかしながら、ご承知の通り林業の情勢は厳しい。木材価格のますますの低迷に加え、過疎化高齢化などの社会情勢や鳥獣被害（特にシカの食害）の悪条件が重なり、森林所有者は林業に対する意欲を無くして再造林放棄が進んでいる。もはや林業は業とは言えない厳しい状況の中で、地域に最も適した循環林業を構築しながら森林所有者に替わってしっかりと地域の緑を守っていくのが私ども森林組合の使命である。

海外からの農業実習生受入

～自然環境を守る大切さ再認識～

石神課長の講義に耳を傾ける実習生

熊本県国際農業交流協会からの依頼を受け、ASEAN諸国（インドネシア9人、ラオス1人）からの農業実習生を受け入れ、監物台樹木園において研修を行いました。

はじめに実習生は、当園の概要説明を受けた後、散策しながら園内の樹木の特徴について学びました。

その後、石神智生指導普及課長が「日本の森林の特徴」と題し、日本の森林の特徴や両国との気候の違い、森林が生物多様性に果たす役割などについて講義を行いました。

実習生は、特にシカの食害に興味を持った様子で、シカ食害による林床植生の消失がほかの動植物や昆虫などへ悪影響を及ぼしていること。ひいては我々人間の生活にも重大な被害をもたらすことの説明に真剣な表情で耳を傾けていました。

短時間の研修でしたが、自然環境を守る大切さを再認識した研修となったようです。

（担当＝指導普及課）

愛林駅伝・緑への思い襷に！

【熊本森林管理署】2月18日、山都町との共催で「自然に親しみ、緑豊かな故郷への愛着を襷につないでいこう」をテーマに第57回愛林駅伝を開催。山都町内の中学校をはじめ17チームが参加し、5区間13・5キロで健脚を競いました。この駅伝は昭和31年に始まり、今回で57回を数えますが、「愛林」と名のつく駅伝は今では全国でただ一つと聞いています。

一斉にスタートする参加チーム＝熊本

森のセミナー開催

【熊本南部森林管理署】環境省希少野生動植物種保存推進員の乙益正隆氏を講師に迎え「森のセミナー」を開催。約50人が参加しました。今回、カシ・シイ類を観察。参加者は樹木を手で触れ感触を確かめたり、乙益氏の説明ではメモを取るなど真剣な表情で森林の役割について理解を深めました。この模様は、テレビ放映されました。

講師の説明にメモを取る参加者＝熊本南部

モニターの声

松元美里子さん

森林の豊かさの大切さ

霧島連山の新燃岳で約300年ぶりに本格的マグマ噴火が発生して丸一年を過ぎました。私は、霧島連山の麓の小林市で生まれ育っておりますので、山への愛着は人一倍深いものがあります。

いつも、山の緑に囲まれていましたので、自然のあるのはあたり前ぐらいにしか思っておりませんでしたが、自分たちで森林は守っていかないといけないのだということを、今は常々思っております。

少しばかり山を保有していますと植林や下刈り、枝打ち等の山の手入れの必要性を知り、人が手を入れて育てないと人間と同じで育っていかないことを痛感しております。「森林の保護育成を一人でも多くの方々がやっていこう」という運動を起こしていったらいいですね。荒れた森林にしていかないことを一人一人が自覚していこうではないですか。

今から40年前には小林市のひなもり岳で全国植樹祭もとり行われました。全国育樹祭も昨年は35回だったのですね。「緑豊かな郷土を守り、森が育んできた歴史と文化を次の世代へ引き継ぎ、一人一人が、森を守り育む」と言う意識を高めることを目的とされていますが、もっともっと、一人一人の国民に何らかの形で啓蒙していかないといけないのではないでしょうか？

私は、「林野」「広報九州」「暖帯林」等を読ませていただく機会を得ましたので、少しは現状がわかるようになりました。

森林の生態系や遺伝資源の適切な保護保全に努めていかなければいけませんね。知らないことが多すぎる自分が今ここにいます。もっともっと国民一人一人に何らかの形で啓蒙し続けていきましょう。

（鹿児島県鹿児島市在住）

東日本大震災に係る大臣感謝状贈呈

2月13日、九州森林管理局において九州国有林関連団体等連絡協議会（会長・横山久雄）（以下協議会）に対し、東日本大震災に係る農林水産大臣感謝状の贈呈を行いました。これは、東日本大震災における農林水産省の食料等の調達・供給活動に関して、顕著な貢献をした企業又は団体の功績を讃え、今後も引き続き災害時における協力を願うため行われたものです。

協議会においては、燃料・食料等の確保に困難を極めていた昨年3月の初動の段階において、九州森林管理局が実施した被災地支援の取り組みに対し、協議会が当局との窓口となり、会員企業など国有林野事業関連業界からのカップ麺約1万食をはじめとした支援物資・役務の提供等の調整を積極的に行うなど多大な貢献をされたところです。

協議会を代表して平之山俊作局長より大臣感謝状を贈呈された南陽一郎専務理事からは、「感謝状をいただき光栄。今後とも社会貢献に協力していきたい。」とのコメントをいただきました。

（担当＝企画調整室）

感謝状を贈呈された協議会の皆さん

唐浜白砂青松の森づくり

【北薩森林管理署】薩摩川内市みどり推進協議会との共催で抵抗性マツ1250本の植樹を実施。「白砂青松の森」を再生しようと本年度で16回を数える植樹には、地区の方々や地元の企業などから約350人が参加しました。植樹後はクリーン活動の一環として、松林内や唐浜海岸林の清掃作業を実施。空缶やペットボトルなどのゴミ回収に汗を流しました

抵抗性マツの植樹をする参加者＝北薩

中学生ら植樹活動に汗

【宮崎南部森林管理署】NPO法人梅ヶ浜21緑化推進運動協議会の呼びかけで、日南市油津の梅ヶ浜地区海岸林へクロマツ200本の植樹が行われました。当植樹活動は10年前から継続して行われており、節目の今年は油津中学校3年生49人をはじめ、先生や地区のから方など約80人が参加。生徒は慣れない手つきで植え付けていましたが、森林の役割を認識する良い体験になったものと思われます。

植樹活動に一所懸命取組生徒＝宮崎

森林春秋

体を動かしてリフレッシュ！

最近、健康志向の若い世代が多いと言われており、これからの日本や世界を担う世代が健康に気を配り元気であることは、大変結構なことである。

昨年の夏、熊本城周辺ではジョギングを楽しんでいる人に加え、思い思いに散歩や体操で身体を動かしているご年配の方々が多いのに驚かされた。昨今、若い人だけでなくスポーツを楽しむ人口の増加でスポーツウェアーの売れ行きも伸びており、各種スポーツイベントも増えているそうだ。こうした変化は一面を捉えると経済的効果も大きく喜ばしいことと言えよう。

私もこうした流行に便乗したわけではないが、成人病予防のため減量を迫られ、散歩やジョギングを行うようになった。最近、「行うように」が「楽しむように」に気持ちが変化している自分に気付いた。

身体を動かす時間帯や場所は人それぞれだと思うが、早朝の屋外であれば陽の出とともに大きくなる鳥の囀りを聴いたり、陽が沈む黄昏時には子供連れの家族が家路を急ぐ光景を目の当たりにすると気持ちも和む。そして何よりも身体を動かした後には心身ともに爽快感を味わえる。この爽快感は、身体を動かすことによる心身への良い影響によるもので、特に有酸素運動を行うことは、血中の脂肪を減少させ、生活習慣病の予防・改善、血行がよくなり毛細血管の発達、活性酸素の減少、疲労の早期回復、自律神経の改善、ストレス解消等に効果があるとされている。

歳をとることは避けられないが、今後も健康で過ごせる贅沢ができるよう、マイペースで身体を動かすことを心がけたいと思う。春も近くなったので、来週はレク森の散策に出かけることにしよう。

（国有林野管理課長　濱田秀一郎）

児童ら木材とふれあう

【西都児湯森林管理署】西都市立銀上小学校の全校児童11人と父母らを対象に「木と子どものふれあい教室」を開きました。当教室は西都市役所、西都市林活議連および地域製材所がメンバーとなっている青壮年会議所と連携して行ったもの。はじめに紙芝居「森林からのおくりもの」を実施。クイズをおりまぜながら森林の働きについて学びました。その後、スギ製材品から椅子や本立て、郵便受け作りに取り組みました。初めてノコギリや金槌を使う児童も多く、悪戦苦闘しながらの作業となりましたが、日ごろと違った授業に児童らは目を輝かせ、木材とのふれあいを体験できた教室となりました。

完成作品を手に喜びの児童ら＝西都児湯

児童らスダジイの巨木を訪ねる

【長崎森林管理署】対馬市立豆酘小学校からの依頼を受け2月12日、「龍良山」において森林学習会を行いました。今年で3回目となる当学習会には小学2～6年生の児童8人に教諭や保護者ら4人が加わりました。今回は龍良山の自然を身近に感じてもらおうと当署職員の案内で散策しながら龍良山原始林のシンボルであるスダジイの木を訪ねました。現地に到着した児童らは、シンボルのスダジイの木の計測を行いました。まず、巻き尺を用いて根回りを計りました。次に、測程と目測で樹高を計測しました。根回り7・8㍍、樹高21㍍のスダジイの大きさに児童らから驚きの声が上がりました。樹齢200年を越えるスダジイの生命力と大きさを肌で感じた児童らには自慢できるふるさとの自然の一つになったと思います。

スダジイの巨木を計測する児童ら＝長崎

都会の中の憩いの森 監物台樹木園の多様な植物

㊷ クスノキ（クスノキ科）

熊本県の「県の木」に指定されていることはご承知のとおりです。世界遺産・広島県の厳島神社の海に立つ鳥居はクスノキで作られているのをご存じですか。クスノキは防虫に優れ耐水性に富み、大木になることから仏像や丸木船・家具などに利用されています。

クスノキの特徴は葉の三行脈で、主脈と側脈の交わる個所には虫こぶがありこれはダニ部屋とよばれフシダニが棲んでいますが人間への影響はありません。

クスノキの名前は、奇妙、神秘な木（くすしき木）であることからこう呼ばれています。

クスノキの日本一は鹿児島県蒲生の大楠です。目通り周囲約24㍍、高さ30㍍、推定樹令850年といわれています。ヤクスギで胸高周囲の一番は縄文杉の16・4㍍です。クスノキは樹木の中では一番大きくなると云われ、そのことを証拠付けしているようです。

クスノキは暖帯の山に普通に見られ、戦後樟脳生産にたくさん伐採され利用されましたが、いまだに日本に自生していたかどうかははっきりしていません。

樹木園の中央、西側のクスノキは、樹木園で最も大きな樹木です。

みどりの散歩路

3月は、旧暦で弥生といい草木が活動を始める時期であり、別れの季節でもある。国有林野事業に、多くの職員を輩出してきた「阿蘇青峰高」「矢部高」も今年度を持って閉校する。誠に寂しい限りである。今年度末で58人の方々が退職される。先日、30数年前、某署で同時期に勤務した数名で、退職されるUさんを囲んでの懇親会を開いた。会では、当時のことが懐かしく語られた。冷房もなく、算盤の時代。各人がパソコンで仕事をすることなど想像も出来なかった。時の流れを改めて実感する一時となった。激動の時代、ご苦労も多かったことと思う。お疲れさまでした▼死者、行方不明者合わせて約2万人という悪夢のような東日本大震災から1年が経過した。被災地では一周忌の法要が執りおこなわれている。大切な人を失った方々の悲しみを思えば胸が痛む。復興までには、相当の時間と金が必要となる。復興支援として一等前後賞合わせて5億円の宝くじが発売され八八億円が回されるという。少しでも役に立てばと思い購入した。（の）